
桃組 + (プラス) 戦記妄想外伝

ゾダグア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃組 + (プラス) 戦記妄想外伝

【Zコード】

Z28630

【作者名】

ゾダグア

【あらすじ】

『生まれ変わり』と、呼ばれる者たちをご存じだろうか。

物語のモデルや歴史上の著名な人物が生まれ変わった者や、血を引いた者たちのことである。彼らは前世で用いた道具を模して造られた『覚醒具』と呼ばれる道具を手にすることで、かつての力に近い物を取り戻すことが可能となる。

愛譚学園にはこの『生まれ変わり』と呼ばれる人々が多数いる。この物語では彼らの一部に起きた出来事を追つて行こうと思つ。

デイルムッシュ編（前）（前書き）

『桃組 + 戦記』の二次創作です。とは言つても、原作での登場人物はとあるキャラを除いてほとんど出ない、ショアワールドもどき。『F a t e / n z e r o』 タグは用語の読み方を借りたので一応書いてあるだけと言つた感じです。

最後に、主人公を中学生に設定しているので、厨臭く、さらに主人公の完全一人称語りにしてあります。まあ、厨臭いのは今までの私の作品全般そうですけど。

それでも構わないと思われたなら、貴方の時間をこの作品に少しだけ下さい。

デイルムッシュ編（前）

あらすじ

『生まれ変わり』と、呼ばれる者たちを『存じだらうか。物語のモデルや歴史上の著名な人物が生まれ変わった者や、血を引いた者たちのことである。彼らは前世で用いた道具を模して造られた『覚醒具』と呼ばれる道具を手にすることと、かつての力に近い物を取り戻すことが可能となる。

愛譚学園にはこの『生まれ変わり』と呼ばれる人々が多数いる。この物語では彼らの一部に起きた出来事をこれから追って行こうと思つ。

まえがき

『桃組 + 戦記』の一次創作です。とは言つても、原作での登場人物はとあるキャラを除いてほとんど出ない、シヒアワールドもどき。『F a t e / n z e r o』 タグは用語の読み方を借りたので一応書いてあるだけと言つた感じです。

最後に、主人公を中学生に設定しているので、厨臭く、さらに主人公の完全一人称語りにしてあります。まあ、厨臭いのは今までの私の作品全般そうですが。

それでも構わないと思われたなら、貴方の時間をこの作品に少しだけ下さい。

私立愛譚学園。

愛譚市の中核に位置する、幼稚園から大学院までの学校設備の複合体である。

選び抜かれた生徒・教職員を含んだ学校関係者は1万5千人を越し、彼らのための宿舎や娯楽設備を周囲に完備した敷地内は、「学園都市」と言つても良いだろつ。

教育プログラムも各生徒の特性や希望に合わせた多数の学科、優秀な生徒・教員に贈られる報償、学内の商業施設での労働体験など、他の教育機関と一線を画している。

『愛譚学園紹介パンフレット20××年度版』より抜粋

『生まれ変わり』と、呼ばれる者たちを『存じだらうか。物語のモデルや歴史上の著名な人物が生まれ変わった者や、血を引いた者たちのことである。彼らは前世で用いた道具を模して造られた『覚醒具』と呼ばれる道具を手にすることで、かつての力に近い物を取り戻すことが可能となる。

愛譚学園にはこの『生まれ変わり』と呼ばれる人々が多数いる。その内の一人に起きた出来事をこれから追つて行こうと思つ。

桃組^{プラス} + 戦記妄想外伝 「デイルムツド編（前）」

学校自体の形態が変わつてゐる愛譚学園において、変人・奇人は列挙しようと思つてもしきれない程いる。例えば高等部芸能学科の暮内紅などは有名モデルとして学園外でも名前が知られているし、毎日夕方になると高等部の何人かが踊る童謡の『鬼のパンツ』……いや、最近『鬼のスース』になつたのだつた。とにかく、それを踊る彼らは学内で時計代わりとして浸透している。

自分、中等部3年のダイアード・ベンブルベンには彼らのような濃い個性は無い。しかし、国際科に所属しない外国人と言う事で、そ

「そこ顔は知られている。

「ホームルーム始めつぞー」

初等部3年からの6年間を過ごしててきたこの学園において、自分は「己」のルーツについて深く考えさせられた

「……つて、あ～つー！」

書いていた途中の自己推薦用紙が突如上から奪われる。慌てて見上げると、自分の所属する3・B担任の抜田鉄ぬきたてつが、奪つた紙を持つてそこにいた。

「ホームルーム中に何をやつているかと思えば……。ダイアリー、こう言つものは帰つてから書け。

「ラ那須、オマエもだ！」

2つ前に居た、級友の那須もオレと同様に用紙を奪られた。

3年生の2学期ともなると、進路について考えていなければ行けない。いくつかある選択肢の中で自分は、この愛譚学園の高等部に進学することにしていた。昼放課に職員室に呼び出されて貰つた用紙に自己推薦文を書いて提出すれば、自動的に面接試験の受験資格を得る。忘れないうちに書いてしまおうと思ったのだが、さすがにホームルーム中に書くべきでは無かつた。

「まったく。これはHRが終わるまで預かっておくぞ。そもそも今のはお前にも大切なんだから、しっかり聞いておけ

抜田は教卓に戻ってしまった。

ああ……これは職員室でのお説教フラグだ。

とりあえず説教の時間を短くできるよう、HRの間くらいは態度をきちんとしたことにした。

「いよいよ明日、高等部の体験授業だ。希望者は指定された持ち物を忘れるなよ。忘れた者は外部への進学者と一緒に普通の授業だ。では、解散。先ほど用紙を没収されたバカ二人は廊下に出る」

ガタガタと音を立て、クラスメイト達が席を立つて行く。オレと那須は主の居なくなつた席を挟んで顔を見合せると溜息を吐く。

「行くか」
「そうだな」

そして、廊下に出た。

× × × × × ×

抜田からの説教を右耳から左耳に聞き流すこと10分弱。用紙を返して貰い、解放されたオレと那須は共に野外活動部に参加していった。

野外活動部とはキャンプ部に野鳥観察部や野戦料理研究会など、とにかく屋外で活動する文科系クラブを、人数不足と言う理由で統合した部だ。

「お、雉きじが飛んでる

と、テントを立てるための杭を打っていたオレは後ろを振り向いた。そこでは那須が双眼鏡を首から下げていながら、裸眼で遠くを見ている。

アイツは那須なすのよしち与一の生まれ変わりらしく、『道部顔負けの』の腕に加えて視力がとてもなく高い。授業中は遠視矯正眼鏡がないと教科書が読めないくらいだ。

【『那須与一』

鎌倉初期の武士で、船の上に乗つていた敵が広げた扇に矢を命中させた程の射手。

狙い打つぜ！（大河内民明丸著『世界のスナイパー百選』1974年民明書房刊より）】

「やつた、どこ？ 久しぶりにキジ鍋喰いたいんだ」

オレは杭を打つ手を止め、那須の下に歩いて行く。

日本に来て初めてキジ肉を食べたが、あれはなかなか美味しい。学内に生息しているなら、生息域を確認して学内食材マップに加えなければ。

嬉しくて思わず覚醒具の『必滅の黄薔薇ガイ・ボウ』を展開してしまったオレに、那須は呆れた口調で返してきた。

「はあ？ こんな所でキジが取れるはずないじゃん。ボクが言ったのは獸基の『雉』」

一気にやる気が失せた。

オレは黄色い短い槍 ゲイ・ボウを収納状態にし、常日頃から持ち歩いているリコードーダーケースにしまった。

那須が見つけたと言つたのは、高等部に居る桃太郎の獣基の『雉^{きじ}』
確か……。

「雉^{きじ}乃木センパイだつたつけ」

那須から奪い取つた双眼鏡で見る先には、雉をモチーフにした仮面を付けた少女の姿。仮面を取つた顔を見たことはないが、結構美人らしい。主である桃太郎の言動に対し、しそつちゅう鼻血を噴き出しているせいだ台無しらしいけど……。

まあ、良い。とにかく那須が野鳥観察をしながら行つているのは……。

「くそう。相変わらず鉄壁のガードだ。パンツビショカ、ふとももさえ挙めないなんて……」

那須^{バカ}は本氣で悔しがつている。

こいつはバードウォッキングにかこつけて、飛行型の獣基の女子生徒のスカートの中身を見ることが趣味なのだ。そのために『道部からのラブコールを蹴り続けている。
せつかくの弓[』]の技術がもつたいたい。
まあ、一緒になつて見ているオレもオレだけだ。

「『[』]あげんよつ

と、うしろから女生徒の声。

奈須と一緒に振り向く。

「げー?」

那須が奇声を挙げるが、原因は何だろ?。オレにはさっぱりわか

らない。なにせ

「馬?」

奇蹄田ウマ科の生き物の顔がオレの視界を埋め尽くしていたからだ。

「ダイアリー、双眼鏡を下ろせ

「おお、双眼鏡覗いていたことをすっかり忘れていたぜ。

那須のアドバイスに従つて双眼鏡を下ろすと、やつぱり馬。

「……じゃない。警備委員長!？」

そこには馬に乗つた警備委員会の長が居た。

「人を見て“げ!?”とはなんですか?『げ!?』とは。それではまるで悪いことをしていたみたいですよ」

警備委員長は流麗な顔立ちに呆れの色を交え、オレたちを見下ろしている。

ちなみに警備委員会とは愛譚学園の平和を守る委員会のことだ。彼らは学園内に居る『生まれ変わり』のことを知らない一般生徒を守ることが彼ら第一の使命で、悪いことをしている生まれ変わりを取り締まつたりもしている。風紀委員と似たようなものだが、一応棲み分けがあるらしい。

それはともかくとして、オレ達のような不屈き者が彼らと出くわしてしまつたらどうすればいいのか。^{ティック・イット・イージ}そんなの簡単だ。

「「逃げろ!」」

オレと那須は正反対の方向に駆けだす。

三十六計逃げるにしかず。昔の人は良い事を言つたもんだ。

「あ、お待ちなさい！ やつぱりまた覗きをしていたのですね！？」

後から警備委員長の声が聞こえるが、無視して逃げる。

テント具を置いてけぼりにしてしまうことになつたが、あの委員長さんのことだ。きっと手をつけたりなんてしないハズだ。後で回収できる。

「「待て！」」

と、前方に2つの影。

見覚えのある警備委員だ。

「ダイア－・ベンブルベン。今日こそはとつ捕まえて、お説教だ！」「そうそつ。そして我ら警備委員の仲間として……」

警備委員会の加入資格として、『動物組』以外で戦う力がある生まれ変わりと言うものがある。オレも那須も条件は満たしているから、更生させて戦力にしようとヤツラはたぐらんでいると言う訳だ。

「あいにくと、オレは官憲の手下となる気はない！」

オレは持前の逃げ脚を使い、一人の間をすり抜ける。

「逃がすか！ この夏休みに習得した技を受けよ。

チエーン・スマッシュ

鎖分銅！」

片方、小柄な男子が錘を付けた鎌をこちらに投げてくる。いかなる妙技か、それは避けたオレの体に蛇の様に絡み付こうとしてきた。だが、そう簡単に捕まる訳にはいかない。

「フライング・サーモン
鮭跳び！」

オレは、生まれ故郷の川に帰つて来た鮭が、遡上の途中に滝を飛んで越える時のような跳躍をもつて回避。

「夏の間に新たなスキル技を習得したのがお前だけと思うなよ。これぞ、フィオナ騎士団員の加盟条件の一つ『鮭跳び』だ！」

オレは前世でフィン・マックール貴下のフィオナ騎士団に所属していた。

騎士団の入団資格の一^つには「自分の額の高さの枝を飛び越える」と言つ項目がある。

前世にできたことだからオレもできる。そう考えて夏休み中実家でずっと特訓した甲斐があつたといつものだ。

「オシーリベンベン

オレは飛び乗つた街路樹の上で警備委員に尻を向けると、そこを軽く叩いてそう言った。

恥ずかしいが、これも逃走する際の流儀。キチンとやらないと「バチがあたる」らしい。太鼓がない場所で「バチ」が当たるとはどう言つことかは分からぬが、ゲッショウ聖誓みたいなものだと思つて我慢している。日本文化は奥深い。

「くつ…馬鹿にして…」

鎖分銅を回収している相方を放つて、もう一人の警備員がスカートを翻してホルスターに手をかける。パンツの色や柄を確認するチヤンスだが、何度もやりあつてるからコイツがブルマを下に履いていることは先刻承知だ。無視。

「はつ！」

放たれる前に手近な道路灯に跳び移る。だがオレの動きは読まれていたのだろう。すぐに追撃が放たれる。

「疾走れ、^はゲイ・ボウ！」

覚醒具を展開。短槍を風車の用に回転させることで、『くない』とか言う投げナイフは全て叩き落とされる。

なにげにコイツも腕を上げてるな。

感心しながらも、オレは無意識の内に次の足場を探し、決定。そのまま木々や街路灯を足場に飛び続け、その場から離れた。

× × × × × ×

「よつ、無事だつたみたいだな……」

寮での夕食。オレは友達と食卓についていたのだが、那須が後から声をかけてきた。

「那須、お前……」

振り返ったオレは、那須の姿に思わず声を上げてしまつた。

ボロボロになつた服。

傷だらけの肌。そして……

「なんだ、その……看板」

首から下げる看板に、

『ぼくはわるいこです』

と、可愛らしい文字で書かれているではないか。

「途中で桃太郎一行に出会つちまつたんだ。雉乃木センパイの下履きを覗こうとしていたことを委員長さんが言つちまつて、一獸基^{プラス}2体（イヌ&サル）+桃太郎による制裁を受けちまつたぜ……」

自業自得だとは思いながらも、同情心が上回つてしまつ。オレも、一步間違えればこうなつていたのだ。

「那須君。ソレ、外しちゃつたら？」

一緒に食事をしていた一人、鳥毛虫^{うたむし}が言う。彼女は女子生徒にしては結構気軽に友達付き合いができるヤツだ。前世が堤中納言物語の『虫愛づる姫君』なだけある。

これでもう少し女子らしく服装とかに気を使つていればなあ……。

【『虫愛づる姫君』

良いとこの娘のクセに、子供と混じつて虫を見るのが好きな姫様の話。でも、物事は本質が大事つてのは確かだよね。（イリヤ・ムシスキー著『ファーブルの仲間たち～その驚異の生態』2004年

「外したことがバレたら、明日から一週間『鬼のパンツ』……」

鬼のパンツとは愛譚の名物の一つだ。

高等部のとある先輩方 まあ、桃太郎の獣基たちなんだが。彼らが幼稚舎に居た頃から続いている習慣で、童謡の『鬼のパンツ』のメロディに合わせてパレードすると言う物だ。今年からは桃太郎も参加して、パンツからスースに変わっている。

初めて見た時は正直、獣基に生まれなくて良かつたと思った。

少し遅い時間だが、食堂にはまだ人が多い。桃太郎達の知り合いも当然居るだろ?。

「「まあ、がんばれ」」

俺は那須の肩に軽く手を置く。同じく席を立つて、鳥毛虫がオレとは反対の肩に手を置いていた。

× × × × ×

『おつと……すまんな、デイルムツド。また零してしまった』

目の前で、また主が手の椀から癒しの水を零す。2回目だ。

半死半生の従僕 ディルムツド^{オレ}を前に動搖したのなら、まだ良かつた。だが、目の前の男は英雄の誉^{ほまれ}も高き、老君フイン・マッケール。そんな事はありえない。

フインは踵を返すと再び泉に手を入れ、水を汲んだ。
しかし、もう間に合わない。

『貴方が……ここまで卑劣とは思わなかつた……』

『オレデイルムッドが悲しげに呟いた。

結末は知つてゐる。だから、もう何も見たくはない。けれども、
瞳を閉じることさえできない。

『俺は、ただ騎士として生きたかつただけなんだ……』

『オレデイルムッドは、そう呟いて事切れた。

続く。

『デイルムッシュ編（中）』

【『デイルムッシュとグラーニアの物語』
主の花嫁候補と一緒に駆け落ちした騎士の、逃亡と裏切りのファンタジー。寝取られ男の恨みは、怖いですわよ。（愛譚学園報道部編
『教えて魔女先生！ 2010年版その2』より）】

桃組^{プラス} + 戦記妄想外伝 「デイルムッシュ編（中）」

「！」

布団を跳ね上げて起きる。

周りの景色は先ほどまでの森の中ではなく、見なれた寮の部屋。だとすればさつきまでは……

「夢か……」

ほつと胸をなでおろす。

しかし、妙にリアルだった。まるでその場で見てきたみたいな。

「ふえっくしょいー うう、寒い……」

寝ている間にかいた汗で寝巻きのシャツは重く、湿っていた。時計を見るともうすぐアラームを設定した時間に針が着こうとしている。オレはアラームのスイッチを切ると、ベッドから降りた。

× × × × × ×

高等部の体験授業と言つ事で、オレはこいつもよう早く寮を出た。遅刻しないように用心したと言つ訳ではない。オレの希望進路先家政科従者専攻による指定だ。

普通科に行く予定の那須なんかは、もう少しうつと寝てこる。少しはやましい。

「でも、朝の空気は気持ちいいな

誰に言つでもなく、呟く。

グラーナと一緒に逃げていた時の落ち着かない朝が懐かしくらいだ。あの時は寝ている内に追つ手が来ていなか警戒したものだし、魔法のかかった泉を避けて朝露で渴きを癒したこともあった。

「 って、なんで自分のことみたいに言つてるんだよー?」

自分でシッ ハリを入れる。

デイルマッドのしてきたことを、自分のじていたことのよつて感じてしまつた。

どうも昨晩の夢のせいか、自分の中のデイルマッドの部分が無意識に表に出ている気がする。

「 やべ、遅れちまつ」

いつもならもつと落ち込むのだが、今日はそれもこかない。
オレは少し歩を早めた。

×××××

「で、一体何やらかしたんだお前」

ところ変わつて生徒指導室。担任の抜田を含めた数人の教師相手に、オレはここで取り調べを受けていた。

事の次第はこうだ。体験先では先輩方と、オレを含む中等部生徒の1対1の組を作ることになった。家政科に含まれるだけあって圧倒的に女子の割合が多い。オレも女性の先輩と組むことになるはずだったのだが、誰がオレと組むかを決めるために争いが起こつてしまつたのだ。従者専攻の生徒は主に仕えるために慎みを持つよう指導を受けている。それでも暴走してしまつたので、オレが怪しいと言つ事になつたのだ。

しかし、“やらかした”つて、先生……。それじゃまるで何か薬か呪術でも使つたみたいじゃないですか。

「違うのか?」

体育の先生 猛ヶ丘が聞いてきた。だがオレが反論するより前に、抜田が代わりに答えてくれた。

「「コイツに限つてそれはないですよ。女には困つてないみたいでし

室内の気温が下がる。抜田以外の教師、とりわけ女性の教師の視線が冷たい。

もう少し言い方と言う物があるとは思つが、アイツが言つた事は正しい。オレは結構モテる部類に入つてゐる。前世の異名が『輝く貌』と言つだけあって、顔は良いのだ。

去年のバレンタインデーなんかは那須達に協力してもらつてチョコを片付けた位だ。

「まあ、専科の連中の薬や呪術であそこまで強力な術はなさそうだしな……」

先輩方にもみくちゃにされていたオレを救出した猛ヶ丘は実感がこもつてゐる。他の先生方も、そんなものがあつたらとつくに連中が使つてるよな。と、納得していた。

専科つて言うのは『専門知識習得科』の略で、呪術師や薬師の子孫が一番多いらしい。どう言う連中かは知らないが、聞いた話から類推した限りではドルイドに近い。前世で養父がドルイドだったので結構親近感が沸くのだが、評判は良くない。どうしてだ？
まあ、いい。とにかく猛ヶ丘は最初からオレの事を疑つてなかつた。つて、事でいいんだよな？

「なら『生まれ変わり』の線で当たつてみるべきですね。ベンブルベンくん。君の前世は？」

尋ねられたので答えるが、たぶん知つてゐる人は少ないだろ？。

「えつと、アイルランドの伝承なんですけど『デイルムッドとグラニア』つて、知つてます？」

「と言う事は、貴方はデイルムッド・オディナ？」

派手なおばさ……痛て、殴りやがつた！？

「おばさんではあります。『魔女先生』とお呼びなさい」

もとい、国際科の魔女先生が訪ねてきた。

しかし、心を読むとは……流石魔女。挽き田の魔女も『破魔の紅薔薇』^{ルグ}がなければ倒せなかつたし、やつぱ恐ろしい。

「はい。オレはディルムツド・オディナの生まれ変わりです」

やつぱりそうだつた。とでも言いたげに、魔女先生は軽く自分の頭を押さえていた。

国際科の連中を率いてるだけあつて、やつぱり詳しいな。

「ディルムツドとグラーフアつて、『トリスタンとイゾルデ』とかの元になつたつて話の？」

「これまた知らない先生が聞いてきた。

今まで友達に話しても知つてゐるヤツいなかつたけど、日本にも知つてゐる人居るんだな。

「ちょっと待つてトセ。と、言つ事は、原因はこいつの能力ってことですか？」

「ええ、100パーセントセツですわ」

抜田の問いに魔女先生は溜息を共に答えた。
オレは嫌な予感がし、田の下を触つてみる。
ほんの小さな膨らみ。一キビとは違うそれは、黒子だ……。

「昨日までなかつたのに、なんで……」

今朝は寝汗が気持ち悪かったのでシャワーを浴びてから着替えたので、ろくに顔を見てなどいなかつた。くそ、ようにもよつて『愛の黒子』が覚醒するなんて……。

「ダイア一、黒子なんて触つてどうしたんだ？」

抜田が聞いて来る。動搖していたオレの代わりに、魔女先生が答えてくれた。

「その黒子こそが今回の騒動の原因ですわ。とりあえず隠せば問題はありません。本當は本人が訓練して抑えなればなりませんが、応急処置としてはそれでいいでしょう」

指を軽く鳴らす魔女先生。瞬間、彼女の手には薄い、プラスチックの光沢をもつた物体があつた。

「これからあなたは、コレを被つていなさい」

黒子を見ないよう顔を背けながら魔女先生が渡して来たのは

「『五つ子戦隊似てるんジャー』？」

の、お面だつた。

× × × × ×

結局、解放されて寮に着く頃には、この「」の「」の短くなってきた日はすっかり沈んでしまった後だった。

人気のない扉を開けると、運動系の部活に入っている連中が下駄箱にたむろっている。ソイツらはオレの顔を見るなりぽかんとした顔を見せたが、やがてどつと、笑い始めた。

オレは笑い声を無視し、自分の靴箱に向かう。だが、肩が掴まれた。

「おいおい、そんな無視すんなって。 マールブラウン・レッドくんよお」

「ゲラゲラ」と笑いながら一人が言つ。

手を振り払つたが、オレが靴箱を背にするように周りを囲んで来た。すり抜けようとするも、人が多くて出来ない。

「 !?」

鬱陶しい。そう思つて力を込めた腕は、連中の一人を手近な柱に叩きつけていた。

寮が揺れる。

「 か、は……」

叩きつけられたヤツが出した、空気だか声だか分からぬ音で連中はざわめきだつた。

「テメエー！」

激昂した一人が拳を振りかざす。

見るからに素人の物と分かる、ボールを投げる動作に似たフォーム。

遅い。お面で制限された今の視界でも十分に見える。
オレは拳を流すと相手の手首を掴み、背負うような形で投げ、地面に叩きつけた。

「ぐ、ウ……」

倒したヤツの鳩尾のあたりを踵で踏みつけながら、オレは周りを睨み付ける。

連中の背後には騒ぎを聞きつけて来たのか、寮生ギャラリーが集まってこちらを見ていた。だがオレが目を向けると、視線を合わせないように顔を背ける。

オレに突っかかって来た連中も、オレに倒された奴らを置いて後ろにじりじりと後退している。だが、踏まれているヤツの苦しむ声を聞いて何人かが意を決してこちらに向かってきた。

「よ、っと……」

手段を選ばなければ大丈夫だが、殺さないように手加減するなど、ひい、ふう……5人の相手は無理だ。日本に来るまで口クに喧嘩をしたこともなかつたクセに、今のオレにはそう判断できた。踏みつけていた足を下ろし、倒れているヤツの体と床との間につま先を突っ込んだ。そして、足で持ち上げる。

「ぐあつ……！」

シユート。

ボールにされたお友達に吹き飛ばされて3人程がその下敷きにな

る。それでも一人が避けることに成功。

まあ、こんなことで片付くとは最初から思っていないが。

「何の能力だが知らねえが、そのふざけたお面の下のツラあ！ 拝ませて貰うぜ！」

一人が走りながら仮面を付けた。動物の生まれ変わりだ。
流石に素手で生まれ変わりを相手に出来るとは思わない。オレはズボンのベルトに手挟んでいたりコーダーケースに手をかけ……

「そこまでだ！」

……ようとした所で停められてしまった。

オレの腕は警備委員の腕章を付けた生徒に止められている。相手の方を見れば似たような状況だった。ただし、あつちは仮面を付けた奴が暴れるので2人がかりで、ついには床に押さえつけられてしまっていたが。

「詳しく話を聞かせてもらうぞ」

腕を引かれる。

オレは、寮の外へと連れ出された。

× × × × ×

それからオレは取り調べを受け、学内の某所で勾留された。某所

と言つたが、別に場所を明かしてはならないと言つ守秘義務がある訳ではない。ただ単に、連行された際に田隠しをされたからどうか分からぬだけだ。

「ほり、遅刻するから急げよ」

再び寮の前に運ばれ、田隠しを取つてもらつた時には既に多くの生徒が玄関を後にしていた。オレは部屋に駆け戻ると、鞄を引っ掴んで寮を後にする。

× × × × × ×

「しつれいしま～っす……」

結局、間に合わなかつた。

教室のドアを開けると朝のHR中で、抜田が教壇で話していくところだつた。

「おひ、ようやく來たか。いらっしゃい」

言われた通りに近づいて行くと教室中の視線が集まり、恥ずかしい通り越して痛い。

そんなオレの感想を知つてか知らずか、抜田は他のみんなに説明し始めた。

「顔にお面なんか付けてるが、こいつが誰だか分からぬって薄情

者はこのクラスには居ないよな？

そう、ダイアード・ベンブルベンだ。

今日からしばらく、コイツはお面をして生活することになった。女子に素顔を見られると問題が起きるから、くれぐれも冗談で外そようと考えるな。でないと先生の仕事が増えるんだ。わかつたな！？

抜田の声には妙に殺氣がこもっていた。顔を見れば、目の下に隈がでている。

クラスメイトも抜田のそんな様子が気になるようで、オレへの視線が減っている。

「それじゃあHR終わるぞ！ ダイアード、事情は聞いているから今回は見逃してやる。次は無いと思え」

そう言つて抜田は教室を出た。

入れ代わりに一限の先生が入つて來たので、オレは自分の席へと向かった。

続く。

デイルムッド編（後）

桃組^{プラス} + 戰記妄想外伝 「デイルムッド編（後）」

お面を着けて生活するようになり、一週間経つた。

『生まれ変わり』達は理解が早かつたし、その他のクラスメイトも何があると察して、いつもどおりに対応しようとしてくれた。だが、腫れものを触るよつたその態度はかえつて辛い。

「はあ……」

オレは授業後に一人、中等部の屋上から運動場を見下ろしていた。にっこりお面は外しているので、運動部に所属する生徒が青春に汗している姿がよく見える。いつもなら陸上部の女生徒のブルマから延びる、美しく締まつたふとももを観察していたのだろうが、今日はそんな気分にはなれない。

「オレ、一生このままなのかな……」

お面を手の上で弄びながら呟く。

何も行動しなかった訳ではなく、今日も制御の訓練を行つた。破壊力がある能力なら被害が目に見えて分かるのだが、オレの能力はすぐには分かりにくい。そこで学校から紹介を受けた工業科の先輩の協力を得て、機械による測定を行つた。まあ、途中で「私は学会に復讐してやるんだー！」とか言って世界征服の準備始めちゃつたから止めに入らなきやならなかつたが……。つうか、成原成行の生まればわりとか言われてもわからんねえよ！

【『成原成行』

鬼才、変人、バカ。彼を評価する代表的な言葉をいくつか挙げる
とすれば、こうなるだろつ。だが彼の才能は世間に認められること
は無かつた。学会を追放されてもなお研究を続けていた彼は、息子
の交通事故をきっかけにある物を造り出した。
人造人間だ。（邪鬼・GUUN著『エターナル・フォース・ブリザード永遠破導氷撃』相手は死ぬ
アンドロイド・ジャッキ）

2009年厨房館刊より）】

とにかく、これが解くことのできる呪いではなく、もはや『能力』
となつてしまつていいことが分かつた。そして、呪いではなくなつ
たそれは、一生オレの生活について回ることも。

「はあ……」

もう何度も吐いたか分からぬ溜息を吐く。人の出入りがない癖に
……いや、だからなのだろう、綺麗なフェンスもたれていると、耳
障りな金属音。

錆びた蝶番ちよつばが軋む音だ。屋上に至る出入り口が開かれようとしている。

ぬかつた。お面を外しているところを見られないよう、わざわ
ざ立ち入り禁止区域の借りていたと言つのに。入つてくるのが女子
生徒と言つ可能性を考慮し、外しつばなしにしていたお面を急いで
着ける。

「JURIは立ち入り禁止区域ですよ。何をしているのです？」

聞こえたのは女子の声。しかも聞き覚えがある。急いで振り向い
て狭い視界で覗くと、そこには警備委員長が立つていた。
いつもの癖で逃げようとしてしまうが、唯一の通路は委員長が塞い

でいる。飛びおりることも考えたが、今の時間帯では一般の生徒に見られてしまうために無理だ。

……って、逃げる必要ないじゃん。

「ちょっと暴走が収まるのを待つてました。もう収まりました。学校からはちゃんと鍵を借りてますんで、失礼」

「正体がばれないように口調はいつもより丁寧に。だが、それくさと彼女の横を通り抜けようとすると、腕を掴まれてしまった。

「その割には破損個所が見当たりませんが？　あと、そのお面はど

うしたんですか、ベンブルベンくん」

「いや、精神に作用するタイプなので……」

……って、なんでこの人、オレだつて分かったんだ！？
問いかけると、こんな答えが返ってきた。

「何度も逃げられた相手ですからね、声くらい覚えますよ」

何と言つが、声に怒りがこもつている。何度も警備委員を振り切つて口にしたから、相当根に持つてそつだ。

もしかして、オレ、ヤバい状況……？

『仮面の下の涙を拭え』……じゃなくて、お面の下で冷や汗を流しながらそつと、オレは委員長の手を腕から外そつと試みる。だが、帰つて強く握られてしまい、痛い。

「あら、まだ話は終わっていませんよ。それでは詰め所まで一緒に来て下さい」

「はー……」

結局、オレは彼女に連れられて警備委員の詰め所まで行くことになったのだった……。

×××××

『オラ、とつとと吐けや……』

ブラインドが下ろされ、外の光が全く届かない密室。オレはそこで2人の取調べ官を相手に取調べを受けていた。

『…………』

黙秘権を使用すると、机を挟んで向かいに座っていた男は立ち上がり、思いきり机を叩いた。

『テメエがやつたってのはあらかた分かっているんだ！ そのままダンマリを続けるつていうのなら……』

男の腕が振り上げられる。だが、それがオレに届くことは無かつた。

『やめとけ、ヤス。そんなことをしたつてコイツは吐かねえよ』

『しかしあやつさん……』

もう一人の男は腕を離すと、オレの目の前にじんぶりを差し出した。

『喰いな。暖かくてうまいぞ』

蓋が取られると、そこは黄金郷エルドラドだった。黄金の様に輝くと卵にキツネ色のカツが閉じられている。その真ん中には緑の三つ葉がささやかながらも、存在感を持つて鎮座している。

同時に、オレの手錠が解かれた。差し出された割り箸を奪い取るよつに受け取ると、急いで割る。そしてオレは貪るようにカツ丼に喰らいついた。……などのやり取りはなく、オレは先輩に来客用のソファ勧められた。

「どうぞ」

他に委員は誰もおりず、委員長自らが入れてくれたお茶が出される。

……湯のみなのにダージリンかよ。

「どうも……」

委員長は自分の分の湯のみを応接机に置くと、オレの対面の席に腰を下ろす。

「で、オレを連れて来て一体どうじよいつてんです？ 取り調べですか？」

窓と言つ窓に鉄格子が填められた詰め所からの逃亡はは容易ではない。オレは最初から逃走など考えずに居直ることにした。

委員長さんを倒して扉を蹴破れつて？ そんな酷いことを女人にできる訳ないじゃないか。

「まあ、まずはそつなりますね。話してくださいますか？」

「お断りします」

すると頭頂部に鋭い痛み。

「話して下さいますね？」

「イヤです」

答えは同じ。

2度も同じ手は喰わないつもりで警戒していたが、今度は下から顎を打ち抜く鋭い衝撃。

「話して下さいますね？」

また断つて、今度こそ攻撃を見切つてやろうと考えたが、むしろ説明した方がいいのではないだろうか。もしかしたら便宜を図つてもらえるかも知れないし、過去の罪も見逃してくれるかも知れない。

「イ……いですよ」

× × × × ×

「自らの能力のせいで暴走する人を、私は何人も見ていました

オレから一通り聞き出すと、委員長は少し目をつぶつて黙考した後に口を開いた。

「彼らは暴走した際の事を全く記憶に残さない」とあれば、すべて覚えていて苦しいこともあります。

ですが、総じて言えるのは、力を制御できるようになつていいことです」

それから彼女は名前を伏せながらいくつかの実例を語り出した。そのどれも某週刊誌のお約束に則つて『努力・友情・勝利』を表現していた。

たぶん彼女が言いたいのは……

「貴方は頼りになる仲間と共に、努力してその能力を支配下に置くのです！」

と語りう事だ。だが、それは難しいんだよな……。

「良い考え方だと思いますよ。今お面を外してあなたに黒子を見てもらいましょうか」

オレは「冗談のつもりでそう言つてみた。鳥毛虫が申し出てくれたけど断つたネタだ。いくら彼女でも、まさか自分に魅了がかけられて平気な訳があるまい。

「ええ。それではお面を取つてください」

委員長は腰を浮かせると、オレのお面に手を伸ばしてきた。慌ててオレは彼女の手を払つ。

「一体何考えてるんですか！？」

「？ 貴方が言ひだしたことでしょう」

疑問府を浮かべる委員長。狙つてるのか？ それとも天然か？ どつちにしても恐ろしい結末が待つていそうだ。

オレのツツコミを受けた後、彼女は一瞬疑問府を浮かべていたが、オレが何を言いたいのか分かつたらしく手を打つた。

「大丈夫ですよ。生まれ変わりなら、多少の抵抗力があります。それに今の貴方に惚れると言つのは……」

「何だらひ。すいぐバカにされた気がする。

「何だらひ言つたのです？ 続きを言つて下せよ」

続きを促すと、彼女は少し迷つた後に「」と言つた。

「はつきり言いますよ。今の貴方に私を惚れさせることなどできませんわ。そんな心配をしなくとも、警備委員には呪いや魔法への耐性だってちゃんとありますよ？」

呆れたように首を振る委員長。そこはかとなく優越感を感じる。いいだらひ、やつてやううじやねえか。もしオレに惚れたら、レット・バトリーみたいに『I t's your problem not mine.（それはアンタの問題で、オレの知ったことじゃない）』とか言ってつってやるからな。あれ？ この台詞は風と共に去りぬじゃなくて、カサブランカだつたかな？ まあいいや。

「行きますよ」

「ええ、おいでなさい」

じつと睨み合ひ。そして、オレはお面に手をかけ……取つた。

「詰め所でなんてハレンチなことをやつてるんですか！……つて、あれ？」

その瞬間、扉を蹴破つて警備委員が部屋に飛び込んできた。この間オレを追つてきた2人の片割れ……女だ。顔を隠さないと大変なことになる。だが、再びお面を付ける前に、オレは彼女と目が合つてしまつた。

「オレの顔を見るな！」

オレはお面を付けるよつ、とにかく顔を隠すことを優先した。両手で顔を覆う。でも、おそらく間に合わなかつただろう。せめて、彼女にも呪いや術などに対する抵抗が強い事を祈るしかない。

「ベンブルベン！？ アンタビッシュで！」……。それに服も乱れてしまいし

あれ？ いたつて普通ですよ。

オレは視界を確保するため、左腕で顔の 特に頬のあたりを隠しながらお面を付ける。

「良いタイミングでしたよ、禰津さん。なにか変な兆候はありますか？ ベンブルベン君が妙に気になり始めた。とか」「な、何言つてるんですか委員長。何でこんなヤツなんか……」

何だか居心地が悪そうな表情をしている。つか、委員長もこんな話出来るんだな。

「何か言つまして？」

「なんでもございません。それより、委員長は大丈夫なんですか？」

生まれ変わりの上女傑とは言え、委員長も女性。何かしらの影響があつてしかるべきはずだ。だが、彼女の様子は先ほどと変わらない。

「ええ、影響はありませんでしたよ。補津さんが部屋に飛びこんで来た時、貴方は見られてはいけないと考えたでしょ？ 力を抑えなことができたんですよ」

彼女の後ろでくの一 補津が事情を知らないので頸を傾げているが、普段と変わったようには見えない。

「一の希望が見えてきました。訓練を繰り返せば、きっと貴方は完全に能力を抑えることができますわ」

そう言って、彼女は手を差し出した。
そしてオレは警備委員となつた。

× × × × ×

「……ってなことがありますよ」

10月の終わり。

オレは辺りを警戒しながら、護衛対象と話をしていた。

『トリック・オア・トリート！ お菓子くれないとイタズラするよ

!』

『『まじよ、これやるからとつと失せろ』

『やだ。だからイタズラするー。』

『この、ケダモノ！』

『ケダモノじやないよ、変態と書かれた淑女だよ。いただきまーす

！』

『キヤーーー。』

イベントにかこつけてイチャつくカッフルの声が寮内に響く。カーテンの隙間からは外に飾られたカボチャランタンを通したオレンジの明かり。そう、今日はハロウィーンだ。

オレは今、警備委員の仕事として、吉良義央よしなかの生まれ変わりである吉良ヤマトの護衛をしてくる。

【『吉良義央』

江戸中期の高家で、通称上野助。『忠臣蔵』において主人の仇として赤穂浪士に殺されてしまう。悪役として有名だが、実際は良い領君で、キチガイの暴走に巻き込まれて幕府に消されたとか。（イン・ボウロン『フリーメーソンから鳴滝まで～世界の陰謀』1975年）

「ああ、ありがとう。しかし、彼らもまだ小さこのこと……」

吉良は顔を曇らせる。決して美男子とは言えないが、穏やかな顔つきで性格も顔と同じく穏やかだった。だが、今は顔に疲れを張りつかせていた。

「安心して下さい。我々警備委員がアイツらを決してあなたに近寄らせません」

オレが彼の護衛についているのには理由がある。今年中等部に途中編入してきた赤穂浪士の生まれ変わり達は、主人の仇として吉良先輩を狙い始めた。最初は一人が突っかかって行くだけだったのだが、人数が集まると先生が止めようとしても危険な集団となつた。そして先輩が一度大怪我を負わされて以来、警備委員が護衛に付いている。

「おつと、アイツらが来たようです」

オレンジに混じつて赤い光。大きな塊となつたそれは次第に男子寮に近づいてくる。

オレは窓を開けると、懐からホラ貝を出して吹く。これで屈強な警備委員の仲間達が援護に来てくれるだろう。オレはそれまで足止めすれば良い。

「さて、オレは外で迎撃してきますんで、帰つて来るまで決してドアを開けないでください」

「わかつた。良かつたら、戻つた後にさつきの話の続きを聞かせてくれないか？」

「ええ、もちろん。それでは！」

軽く敬礼し、オレは窓の縁に足をかける。そして、跳んだ。

「イー……やつほうッ！」

先輩の部屋は3階、だが下は芝生だ。前世の力を完全にコントロールしている今のオレにとって、何の障害にもならない。着地。

そのまま駆けだす。

街路にまだ残っていた生徒達はヤツラに巻き込まれないように道

を開ける。その中には生まれ変わりも何人か見られる。ガキ相手に何をビビッてやがる。

「ダイアー」

隣にはいつのまにか禰津が居る。オレが速度を落とすと、彼女は並走しながら報告して来る。

「先生方から許可が下りたわよ。『死ななきや多少傷めつけてもオツケ』だつて。でも、ちゃんと警告するのよ。」

「わかつた。総員に通達『オレが突っ込んだらついて来い』つてな『全く、脳筋は救えないわね。了解よ、『委員長』』

肩をすくめたかと思うと、禰津の姿は消えた。

オレは走りながら、覚醒具を展開する。黄色と赤の魔槍は、ランタンの光を受けて鋭く光っている。

「「「トリック・オア・トリート。お菓子くれなきや、打ち入るぞ！」」

くれてやつても打ち入ろうとするだらうが。

呆れながらもオレはヤツらから10mほど離れた位置で停止。

「警備委員だ。お前らの数々の狼藉、これ以上学校は見逃さないぞ。大人しく集団を解散しろ」

一応警告をするが、おそらくは無駄だらう。ヤツらはオレを路傍の石か何かかと考えているのか、進軍を止めやしない。

と、飛んできた矢が提灯の一つに突き刺さった。おそらくは那須。

「 たく、オレが一番槍だってのに」

オレが完全に能力をコントロールできるまで巴先輩は何度も特訓に付き合ってくれた。時には専科に魅了を解いてもらわねばならぬ事態ディルムラードにもなつたが、オレは彼女を一時の主として戦い抜いた。前世のオレが進もうとし、途中で断ち切られた道。それを疑似的に体験することが出来たのだ。

『今度は貴方が上に立ちなさい』

引退する時、先輩はそう言ってオレにホラ貝ホラガイをくれた。やがてオレもこう言って部下に渡すのだろう。そして、今度は終生の主人と共に生き、死ぬ。

「ダイアリー・ベンブルベン、参るー！」

終わり。

デイルムッシュ編（後）（後書き）

妹から『桃組 + 戦記』を勧められた時に思いついたSS。当初はファイオナ騎士団を出しての前世否定系だったのですが、何度も筆を置いては取るという動作を繰り返した結果、こうなりました。ちなみに、執筆をスタートしたのはこれまで投稿した中でこれが一番早いです。

……感想が長くなりました。全編主人公一人称と言う試みをしたために読みにくいこともあったでしょう。はたまた、祐喜達の活躍を期待していた方もいたかも知れません。ですが、本編を読んでこのあとがきも読んでくださった方に言います。私の作品を読んでくださってありがとうございます。愛譚学園に所属するオリキャラ達を主人公としたこのシリーズは時々続けるつもりでいます。もしお気に召しましたら、次の私の作品もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2863o/>

桃組+(プラス)戦記妄想外伝

2011年1月9日20時45分発行